



思齊のしせい

大阪府立思齊支援学校 支援室だより
第61号 令和4年11月2日

小学部低学年、給食指導を通して感じたこと



私は前任校からの勤務も含めて、小学部で働き出して4年目です。それまでは講師も含め、地域の中学校と、支援学校の中学部で働いていました。今号では、私が小学部に来て学んだことを、担任を持っていた小学部1年生のAくんの事例を通して紹介します。担当は、小学部松田です。

Aくん（個人の事例のため、一部内容を変えています）

入学時、Aくんは偏食が強く、食べられるものは、白ごはん、味付けのり、特定のスティックパンのみでした。給食時間は、白ごはん、味付けのり、コッペパンは自ら食べることができました。保護者からの強い希望のもと、入学してすぐに偏食指導を始めました。

苦手な食材は、まずはスプーンで触るところから始め、指で触る、触った指を頬や唇につける、粒程度の食材を唇につける、少し舐めてみる、口に入れてみる、口に数秒滞在させる、というように、何か月もかけて超スモールステップで、食材を口に近づけていきました。その際は必ず、それができたら白ごはんを食べる、というように、好きなものを励みに取り組めるようにしていました。するとAくんは、「給食で出る食材は、少なくとも口に入れても安全そうだ」と判断したのか、自ら口に入れるようになっていました。食材を口に入れるまでに要した期間、一年。しかし、そもそも苦手な食材を触ることもできなかったAくんが、食材を口に入れることができるなんて、大進歩です。

2年生になり、口に入れる食材の種類を増やすようにしていきました。その中で抵抗の少ないもの（Aくんの場合、にんじん）を、飲み込んでみることに挑戦しました。するとある日、ついに1ミリ四方程度のにんじんを飲み込めるようになりました。それから毎日、にんじんを一かけらだけ食べることができるようになりました。そこから徐々に種類や数、量を増やしていき、2年生の終わりには、1センチ四方ほどの食材を3つずつ食べることができるようになりました。1年生の初めは給食時間中ずっと硬い表情だったAくんも、2年生の終わりには、笑顔で給食時間を過ごせるようになりました。

小さな成功の積み重ねが、「やってみようかな」につながる

私はこの経験を通して、子どもたちがさまざまな葛藤を乗り越えながら、小さな成功を積み重ねることで少しずつ自信をつけ、初めてのことであっても「やってみようかな」と思えるようになるのではないかと思います。小学部の児童は、初めてのことがとても多いです。学校という場所、クラスや学年という集団、授業、行事…なにもかも、人生初めて。低学年の児童は特に、何をやるにしても、どこに行くにしても、不安や恐怖心を抱きながら、精一杯頑張っているように思います。説明を聞いて理解する力や想像力もまだまだ未熟な子が多いです。だからこそ、小学部では特に、丁寧な指導、余裕のある時間設定がされているように感じます。教材ひとつをとっても、準備にもものすごく時間と手間をかけていて、正直、そこまでしないといけないのか、と小学部に来た当初はとても驚きました。

「小さな成功を積み重ねる」というのは、時間がかかったとしても、ゆっくり粘り強く、小さな目標をたくさん達成していくことだと思います。私は、児童の実態や、時期、タイミングを見極めつつ、そして児童としっかりと向き合いつつ、小さな成功と一緒に喜び合える教員になりたいと感じました。そして、中学部、高等部に進学しても、「自分ならできる」という自信を持って、たくさんの「初めて」にチャレンジできる子どもたちを、小学部のうちから育てていきたいと思っています。みなさんは、どのように思われますか？

